

「利他共生」

一宮市立浅井中学校三年

福田 凧紗

「グループホームはここにいる人達全員が家族なんですよ」という職員の方の言葉を頭に置きながら今日一日ボランティア体験を頑張ろうと思いました。

まず初めに、おばあさん二人と職員の方と一緒に楽しくお話をしました。職員の方が離れた後、一人のおばあさんから、「あなた達はここを施設と呼んでいるの？」と険しい表情で尋ねられました。私は何と答えたらいいのか戸惑いながらも、グループホームの名前を言って、「施設とは呼んでいませんよ」と伝えました。おばあさんは「そうか」と言って、安心した表情になりました。そして、「ここは温かくて明るくてとても良い所なんだよ」と言われたので私も同調しました。少し経つと、また険しい表情で質問をされました。私は一度目と同じ返答をし、おばあさんも同じ事を繰り返し話してくれました。そして、三度目の同じ質問をされた時、私は考えました。このおばあさんは、何を言ったら喜んでくれるのだろう。私は、おばあさんの返答を真似てみようと思いました。「ここは温かくて、明るくてとても良い所ですね」と言いました。するとおばあさんは、ほろほろと涙を流し「ありがとうね」と言いました。ずっと泣き続けるおばあさんを見て、隣ですっと聞いていたおばあさんが、そっと手を肩にのせて、「家族と離れてね」と言いながら、その方まで泣き出してしまいました。私は動揺し、おばあさんからありがとうと言われたことをすっかり忘れ、「どうしよう。泣かせてしまった」と悲しくなり、泣きそうになりました。

このボランティア活動で沢山の事を学び、感じ、考えるきっかけができました。認知症の方が、繰り返し尋ねる事に対して「さっき言ったよ」と言って不安にさせる事や、傷つける事を絶対に言わない。そして、何度も丁寧に寄り添い声を掛けてあげる事が大切だと学びました。私は初め「何かしてあげたい」という思いでした。しかし、私がしてもらっていたのだと感じました。利用者さん達と一緒に過ごすことで、心が穏やかになりました。

私の学校の目標には「利他共生」という言葉があります。今回のボランティア活動で、私の将来の夢、看護師への道がしっかりと見えました。他の人の為に尽くし、共に共感しながら生きる喜びを分かち合える、そんな人になりたいです。コロナ禍で大変な中、ボランティアの体験が出来た事には、本当に感謝しています。今後も夢に向かって、勉強していきたいと思えます。



ました。その時職員の方が気づき、あえて話には触れずに、おばあさんにちり紙を手渡し、隣のおばあさんには、「何で〇〇さんまで泣いているの？もらい泣き？」と声を掛けました。私は、そばで他の利用者さんと話をしていたのに、私達の会話も気にかけてくれていたのだと感じ、とても感動しました。私は三回目で答えを出すことができた嬉しさの反面、もっと早く気付いていれば良かったと反省しました。

昼食中、あるおばあさんが無表情でいる様子に気付きました。私はそのおばあさんが、口元に手を添えて口を隠す素振りをしていました。私は「マスクですか？」と自分のマスクを指しながら聞きました。頷いていたので、職員の方に伝えたとこころ、「いつも薬を飲んで、歯磨きをしてからマスクをつけるのよ」と教えてくれました。そのおばあさんは、いつもその素振りを見せるのだそうです。私はその時、余計な事を言ってしまった。職員の方に時間をとらせてしまったのかと不安になりました。しかし、職員の方が「薬を飲みましょうね」と言って、薬を準備しに行った時に、おばあさんが、「気付いてくれてありがとう」とニコリして言ってくれました。その一言で、さっきまでの不安は消えて私まで嬉しくなりました。昼食後、私は元気なおばあさんの隣でちぎり絵を手伝うことになりました。おばあさんは、ちぎった紙をシールだと勘違いをしていたのか、はがそうと必死でした。「これはのりを付けて貼るのですよ」と伝えて、一緒に貼りました。おばあさんは「昔はできたんだけどね」と何度も言っていました。認知症になる前は簡単に出来た事が、今はできないと思ってみることが伝わってきたので、認知症というのは、本人にとって、とても辛い症状だと感じ悲しくなりました。でも、今の私にできることは、楽しくちぎり絵を進めていく事だけです。そうして一緒に作業をしていくうちに、共感をするということの大切さを知りました。作業中、この表現は失礼かもしれませんが、おばあさんが紙を貼ることができたと共に感動したり、のりが塗れた事を共に喜んだり、これを何度も繰り返す事で、私の心は癒されて、とても温かくなり、愛しいと感じるようになりました。